

慶應義塾大学 SFC研究所

看護ベストプラクティス  
研究開発ラボラトリ

*Report of 2021*

# 看護ベストプラクティス研究開発・ラボ

Laboratory on Innovative Research and Practices for Nursing

開設：2012年3月1日

代表者：宮脇 美保子（看護医療学部 教授）

連絡先：慶應義塾大学看護医療学部

本ラボト리는、最善の看護実践（ベストプラクティス）に不可欠である、(1) 看護実践の質保証 (Quality) を推進する実践研究開発、(2) 個別化・最適化した看護実践を現場に浸透・波及 (Utility) できる看護リーダーの養成、(3) 当事者の価値を尊重する倫理的看護実践の醸成 (Explore)、をめざすものである。

## ■メンバー

宮脇 美保子（看護医療学部 教授）	ラボトリー・リーダー / 倫理的看護実践研究開発
武田 祐子（看護医療学部 学部長）	遺伝看護実践研究開発
野末 聖香（看護医療学部 教授）	精神看護実践研究開発
永田 智子（看護医療学部 教授）	倫理的看護実践研究開発
深堀 浩樹（看護医療学部 教授）	高齢者看護実践研究開発
田口 敦子（看護医療学部 教授）	看護実践研究開発
矢ヶ崎 香（看護医療学部 教授）	がん看護実践質保証研究開発
小池 智子（看護医療学部 准教授）	ベストプラクティス先導ナース開発研究
福井 里佳（看護医療学部 准教授）	倫理的看護実践研究開発
福田 紀子（看護医療学部 准教授）	精神看護実践研究開発
宮川 祥子（看護医療学部 准教授）	看護実践研究開発
大坂 和可子（看護医療学部 准教授）	がん看護実践質保証研究開発
朴 順禮（看護医療学部 専任講師）	看護実践研究開発
石川 志麻（看護医療学部 専任講師）	看護実践研究開発
山本 亜矢（看護医療学部 専任講師）	倫理的看護実践研究開発
新幡 智子（看護医療学部 専任講師）	がん看護実践質保証研究開発
田村 紀子（看護医療学部 専任講師）	がん看護実践質保証研究開発
杉本 美希（看護医療学部 助教）	がん看護実践質保証研究開発
本田 晶子（看護医療学部 助教）	がん看護実践質保証研究開発
山本 香織（看護医療学部 助教）	がん看護実践質保証研究開発
浅川 翔子（看護医療学部 助教）	看護実践研究開発
高橋 知彦（看護医療学部 助教）	看護実践研究開発
加藤 由希子（看護医療学部 助教）	看護実践研究開発
田久保美千代（看護医療学部 助教）	精神看護実践研究開発
平岩 千明（看護医療学部 助教）	精神看護実践研究開発
秋元 直子（看護医療学部 助教）	倫理的看護実践研究開発
松寄 愛（看護医療学部 助教）	倫理的看護実践研究開発
山本 なつ紀（看護医療学部 助教）	倫理的看護実践研究開発
真志田祐理子（看護医療学部 助教）	高齢者看護実践研究開発

## 目的

医療現場では、日々新たな診断・治療が開発され、診療および看護はますます高度化・複雑化している。一方で、医療の効率化が叫ばれ、入院の短縮化、外来診療への移行が推奨され、患者や家族には通院による治療継続、セルフケアの促進が求められている。患者や家族は、移り変わる診療の場・環境のもとで、高度な医療内容を理解し、納得のいく判断のもとに診断・治療を受けることに多大な努力をしている。また、自身のワークライフと療養のバランスを上手にとることに力も注いでいる。複雑で高度化した医療の中で、〈安心と安全〉が保証され、〈医療に対する納得と満足〉が得られ、〈当事者の価値が尊重〉され、〈充実した生活や生き方〉ができるよう、最善の看護実践（ベストプラクティス）を提供する必要がある。

本ラボト리는、最善の看護実践（ベストプラクティス）に不可欠である、(1) 看護実践の質保証 (Quality) を推進する実践研究開発、(2) 個別化・最適化した看護実践を現場に浸透・波及 (Utility) できる看護リーダーの養成、(3) 当事者の価値を尊重する倫理的看護実践の醸成 (Explore) 、をめざすものである。この目的のために、〈看護実践の質保証研究開発〉〈ベストプラクティス先導ナースのキャリア開発〉〈倫理的看護実践のためのシステム構築〉の3つの研究グループを組織化する。研究グループには、臨床現場においてベストプラクティスを推進している看護専門職者のほか、本ラボト리의主旨に賛同いただける学外の研究組織、医療施設の方々を訪問研究員として迎え、共同研究をすすめる。忘れてならないのは、患者中心の視点をラボト리의根幹につねに置くことである。そのために、定期的に、市民フォーラムを開催し、患者団体、地域住民等との交流を行い、研究成果の発信、評価、意見交換を行っていく。各プロジェクトの内容を記す。

### プロジェクト A: 看護実践の質保証研究開発

臨床現場における最善の看護実践のアウトカムは、患者の安全と安心の保証、患者・家族の医療に対する納得と満足、患者のQOLの向上である。患者アウトカムを促進するための最適なケアのエビデンスを集積し、標準化を行う。ロジックモデル等の質評価理論に基づいてケアの質改善デザインを設計し、標準化したケアの検証を行う。

### プロジェクト B: ベストプラクティス先導ナースのキャリア開発

臨床現場でベストプラクティスを浸透・波及できるかは、〈医療イノベータ〉の役割を担う看護リーダーの活躍にかかっている。このプロジェクトでは、最適なケアと患者のアウトカムを促進するために、患者（個人、家族、またはグループ）や他の専門職との治療的関係と協働関係を結び、各チームやユニットにおいてケアの質保証システムを稼働し、ケアの改善を先導する看護リーダーの育成プログラムの開発、検証を行う。

### プロジェクト C: 倫理的看護実践のためのシステム構築

熟慮・納得のもとに、自身にとって最善の診療・ケアを選択する意思決定支援プログラムの開発と検証、および複雑な病態・治療過程、脆弱な療養環境で生じ得る倫理的課題に対応する臨床倫理コンサルテーションシステム構築と実証をすすめる。併せて、組織的に倫理的看護実践が行えるケアリング風土の醸成を探索する。

## 研究活動計画の概要

### プロジェクト A: 看護実践の質保証研究開発

患者アウトカムを促進するための最適なケアのエビデンスを集積し、標準化を行う。

### プロジェクト B: ベストプラクティス先導ナースの開発

臨床現場でベストプラクティスを浸透・波及できるリーダーナース、臨床指導ナースの能力・役割を特定化し、キャリア開発プログラムを検討する。

### プロジェクト C: 倫理的看護実践のためのシステム構築

事例検討により、複雑な病態・治療過程、脆弱な療養環境で生じる倫理的課題について検討する。

# 遺伝性腫瘍患者・家族に対する看護支援の開発に関する研究

武田 祐子 慶應義塾大学看護医療学部 学部長

## A. 目標

遺伝性腫瘍患者・家族に対して、適切な医療の活用によるがん死の回避と、QOL向上に寄与する看護支援を開発し、提供のための基盤を構築する。

## B. 計画および実施過程

- 1) 「消化管過誤腫性腫瘍好発疾患群の小児から成人へのシームレスな診療体制構築のための研究（研究代表者：杉山佳子（中山佳子）信州大学）を用いた日常生活における転倒リスクの解明を目指す。
- 2) がんゲノム医療に対応するがん看護専門看護師育成のための介入研究（研究代表者：村上好恵 東邦大学）

## C. 目標達成状況

### 1. 研究実践活動

- 1) 消化管過誤腫性腫瘍好発疾患群（Peutz-Jeghers 症候群、Cowden 症候群、若年性ポリポシス症候群）について、診療経験を有する医療者を対象として、患者・家族の現状と課題に関するインタビュー調査を実施した。質的分析により患者・医療者・医療提供体制の現状および疾患特性に関する 16 のテーマが抽出された。
- 2) がんゲノム医療におけるがん看護専門看護師の教育プログラムの E ラーニングによる介入効果を検証するためのサイト制作の準備を行った。

### 2. 今後の課題、展望

- 1) 消化管過誤腫性腫瘍好発疾患群の診療に関する全国頻度調査と英語診療ガイドラインの論文公開への協力
- 2) がん看護専門看護師グループを対象とした学習プログラムの実施と評価

### 3. 2021 年度の業績

#### 【論文】

1. N.Fukuzaki, Y.Kiyozumi, S.Higashigawa, Y.Horiuchi, M Mizuguchi, H Matsubayashi, S Nishimura, K Mori, A Notsu, I Suishu, S Ohnami, M Kusuhara, K Yamaguchi, A Z. Doorenbos, Y Takeda. Sharing Genetic Test Results of Germline Pathogenic Variants of Hereditary Cancer with Relatives: A Single-center Cross-sectional Study. JJCO,51 (10) :1547-1553. 2021 <https://doi.org/10.1093/jjco/hyab110>

2. 武田 祐子. 最新の話題、制度、情報 遺伝性腫瘍に関連した人材育成と認定制度・連絡会議等 遺伝看護専門看護師制度、遺伝子医学：別冊遺伝性腫瘍の基礎知識：368-370. 2022.
3. 武田 祐子. 「ヒトの遺伝」リテラシー向上への社会実装の現状と課題 非遺伝専門医療職の「ヒトの遺伝」リテラシー 卒後の人材育成の立場から、日本遺伝カウンセリング学会誌 42 巻 1 号 ,51-55.2021
4. がんゲノム医療における看護の役割とは～がん遺伝子パネル検査を受ける患者への関わりから考える～ (シンポジウム座長), 第 36 回日本がん看護学会学術集会, 2022 年 2 月
5. がん看護の中にゲノム医療を浸透させていこう～院内教育システムの構築を考える～ (交流集会企画・運営), 第 36 回日本がん看護学会学術集会, 2022 年 2 月
6. 安藤広子, 溝口満子, 有森直子, 中込さと子, 武田祐子、歴代理事長リレートーク；道を拓き歩み続ける遺伝看護第 20 回日本遺伝看護学会学術大会, 2021 年 9 月
7. 武田祐子. 医療機関の需要と供給に応えるために—遺伝看護専門看護師育成の取り組みの実際と課題—, 第 9 回日本 CNS 看護学会, 2022 年 7 月
8. 高橋佳子, 武田祐子. 医療者が捉えた消化管過誤腫性腫瘍好発疾患群の患者の現状—カウデ症候群、ポイツ・ジェガース症候群、若年性ポリポーシス症候群—, 第 21 回日本遺伝看護学会学術大会, 2022 年 8 月
9. 武田祐子. 「自分らしく生きる」を支えるのために看護ができること, 第 21 回日本遺伝看護学会学術大会, 2022 年 8 月

研究 1. 生体センサを活用した心不全患者のための  
「こころと眠りの支援プログラム」開発と評価  
研究 2. 感染症パンデミックにおける精神看護専門看護師  
による看護職への支援

野末 聖香	慶應義塾大学看護医療学部	教授
福田 紀子	慶應義塾大学看護医療学部	准教授
田久保美千代	慶應義塾大学看護医療学部	助教
平岩 千明	慶應義塾大学看護医療学部	助教

### A. 目標

研究 1（研究メンバー：野末聖香，福田紀子，田久保美千代，久保美紀，佐藤雅明，白石泰之，中野直美）  
心不全患者の睡眠とうつ・不安に焦点をあて、生体センサを活用し、web を介して遠隔的に支援する「こころと眠りの支援プログラム」を開発し、その効果を検証する。

研究 2（研究メンバー：野末聖香，福田紀子，田久保美千代，平岩千明）  
COVID-19 拡大下における精神看護専門看護師による看護師への心のケアの構造とプロセスを明らかにし、感染症パンデミックにおける心のケアマニュアルを作成する。

### B. 計画および実施過程

研究 1：心不全患者を対象とした質問紙調査の分析を継続した。また、生体センサを用いた睡眠データの収集・集約に関する実施可能性の検討を目的とした調査の結果分析を行い、睡眠データ収集・集約システムの構築を図った。質問紙調査の分析結果および睡眠とストレスマネジメントの支援方法、遠隔看護の手法等に関する文献検討をもとに、遠隔的看護支援「こころと眠りの支援プログラム」を作成し、慢性心不全患者を対象としたパイロットスタディの実施計画を立てた。

研究 2：2021 年は、17 名の精神看護専門看護師を対象としたインタビュー調査の分析を行い、論文投稿に向けた執筆準備を行った。

### C. 目標達成状況

#### 1. 研究実践活動

研究 1：

(1) 心不全患者の睡眠状態、身体状態、精神状態、セルフケアなどに関する実態調査は、不眠と評価された対象者が 1/3 程度あり、不眠重症度を従属変数とする重回帰分析の結果、感情、睡眠のセルフケア行動、不安の 3 変数を独立変数とする有意な回帰式が得られ、日常生活の側面からこころと眠りのセルフケアを支援することの有用性が示唆された。また、確認的因子分析によって抽出された 3 つの潜在変数（疾患管理、こころの健康、QOL）間の関連構造について共分散構造分析によるパス解析を行い、心不全患者の疾患管理において、こころの健康を高める介入を行う重要性を示す結果が得られた。2022 年度に関連学会誌に論文投稿予定である。

- (2) 健常人 5 名を対象に、睡眠センサ機器を用いた睡眠のモニタリングとデータ収集・集約および睡眠センサ機器に対する使い勝手について予備的調査を実施した。その結果、睡眠データ集約システム、対象者毎に睡眠日誌を可視化するシステムが構築できた。睡眠センサは、設置が簡便で対象者への負担が少なく、遠隔支援に有用なセンサであることが確認できた。2022 年 7 月に関連学会学術集会で発表予定である。
- (3) 心不全患者の質問紙調査結果および睡眠支援に効果が示されている手法を参考に、遠隔的看護支援プログラムについて検討を重ね、支援プロトコル及び心理教育教材を作成した。慢性心不全患者を対象としたパイロットスタディを計画し、実施予定施設の倫理審査を受け承認を得て、2022 年 4 月より開始予定である。今後は、遠隔支援プログラムの実施可能性を検討後、プログラム内容の効果について検証することが課題である。

研究 2：COVID-19 感染症第 1 波から第 3 波における精神看護専門看護師による看護師支援に関わる現象の構造とプロセスが明らかになった。インタビューデータの分析をすすめ、2022 年度中に論文投稿予定である。また今後は、第 3 波以降の支援について、さらなる調査の実施と、研究結果に基づいた感染症パンデミック下における心のケアマニュアル作成を検討していく。

## 2. 2021 年度の業績

- ・ 野末聖香：第 18 回日本うつ病学会総会うつ病看護研修会「ガイドラインに基づく講義と事例検討」座長 / 講師 .2021 年 7 月
- ・ 野末聖香：第 18 回日本うつ病学会総会大会企画シンポジウム「うつ病看護ガイドラインの目指すものー現状と今後の課題ー」座長 / 講師 .2021 年 7 月
- ・ 田久保美千代, 佐藤雅明, 福田紀子, 久保美紀, 野末聖香 .Web を介した「心不全患者のこころと眠りの支援プログラム」のための睡眠データ収集システムの構築 . マルチメディア, 分散, 協調とモバイル (DICOMO2022) シンポジウム .2021 年度採択済 .2022 年 7 月発表予定
- ・ Noriko Shirai, Mayumi Nagata, Michiyo Takubo, Yumi Iwamitsu (2021) .Evaluation of the usefulness of a nurse-centered delirium care program. Japanese Journal of General Hospital Psychiatry. Vol.33,No.1,44-56
- ・ 田久保美千代：第 37 回日本ストレス学会・学術総会特別企画「看護師のメンタルヘルス」座長 .2021 年 10 月
- ・ 高野歩, 平岩千明, 及川江利奈, 富川明子, 野沢恭介 (2021) .Substance Use Stigma Mechanism Scale 日本語版の信頼性・妥当性の検討 . 第 31 回日本精神保健看護学会学術集会 .2021 年 6 月
- ・ 野沢恭介, 平岩千明, 及川江利奈, 富川明子, 高野歩 (2021) .Self-Efficacy in Seeking Mental Health Care 日本語版の因子的妥当性の検討 . 第 31 回日本精神保健看護学会学術集会 .2021 年 6 月



# 老年看護における Evidence Based Practice の促進に関する研究

深堀 浩樹 慶應義塾大学看護医療学部 教授

## A. 目標

老年看護において科学的根拠に基づく実践 (Evidence Based Practice) を促進することにつながる研究活動を行う。

## B. 計画および実施過程

上記の目標に沿う活動として、高齢者施設での看護や認知症ケアに関する研究等を実施し、論文の公開・学会発表を行った。

## C. 目標達成状況

### 1. 研究実践活動

査読付き論文および学会発表を合わせて 15 件公表した。うちいくつかは臨床看護師との活動であった。

### 2. 今後の課題、展望

看護・医療・福祉領域における臨床実践の質の向上に寄与し、社会的にもインパクトのある研究成果を公表し、社会実装につなげるように努めていく。

### 3. 2021 年度の業績

1. Fukui, S., Otsuki, N., Ikezaki, S., Fukahori, H., & Irie, S. (2021). Provision and related factors of end-of-life care in elderly housing with care services in collaboration with home-visiting nurse agencies: a nationwide survey. *BMC Palliat Care*, 20(1), 151. <https://doi.org/10.1186/s12904-021-00847-7>
2. Morita, K., Fukahori, H., Ogawara, H., Iwagami, M., Matsui, H., Okura, T., Itoh, S., Fushimi, K., & Yasunaga, H. (2021). Outcomes of a financial incentive scheme for dementia care by dementia specialist teams in acute-care hospitals: A difference-in-differences analysis of a nationwide retrospective cohort study in Japan. *Int J Geriatr Psychiatry*, 36(9), 1386-1397. <https://doi.org/10.1002/gps.5537>
3. Nasu, K., Fukahori, H., & Miyashita, M. (2021). Long-term care nurses' perceptions of a good death for people with dementia: A qualitative descriptive study. *Int J Older People Nurs*, e12443. <https://doi.org/10.1111/opn.12443>
4. Nishikawa, Y., Fukahori, H., Mizuno, A., & Kwong, J. S. (2021). Cochrane corner: advance care planning for adults with heart failure. *Heart*, 107(8), 609-611. <https://doi.org/10.1136/heartjnl-2020-318458>

5. Shorey, S., Ang, E., Baridwan, N. S., Bonito, S. R., Dones, L. B. P., Flores, J. L. A., Freedman-Doan, R., Fukahori, H., Hirooka, K., Koy, V., Lee, W. L., Lin, C. C., Luk, T. T., Nantsupawat, A., Nguyen, A. T. H., Nurumal, M. S., Phanpaseuth, S., Setiawan, A., Shibuki, T., . . . Kunaviktikul, W. (2022). Salutogenesis and COVID-19 pandemic impacting nursing education across SEANERN affiliated universities: A multi-national study. *Nurse Educ Today*, 110, 105277. <https://doi.org/10.1016/j.nedt.2022.105277>
6. Takahashi, Z., Yamakawa, M., Nakanishi, M., Fukahori, H., Igarashi, N., Aoyama, M., Sato, K., Sakai, S., Nagae, H., & Miyashita, M. (2021). Defining a good death for people with dementia: A scoping review. *Jpn J Nurs Sci*, 18(2), e12402. <https://doi.org/10.1111/jjns.12402>
7. Yamagata, C., Matsumoto, S., Miyashita, M., Kanno, Y., Taguchi, A., Sato, K., & Fukahori, H. (2021). Preliminary Effect and Acceptability of an Intervention to Improve End-of-Life Care in Long-Term-Care Facilities: A Feasibility Study. *Healthcare (Basel)*, 9(9). <https://doi.org/10.3390/healthcare9091194>
8. Yamakawa, M., Kanamori, T., Fukahori, H., & Sakai, I. (2021). Sustainable nurse-led care for people with dementia including mild cognitive impairment and their family in an ambulatory care setting: A scoping review. *Int J Nurs Pract*, e13008. <https://doi.org/10.1111/ijn.13008>
9. Yamamoto-Kon, A., Fukahori, H., Ogata, Y., & Nagano, M. (2021). Validity and reliability of Japanese version of the pressure ulcer knowledge assessment tool. *J Tissue Viability*, 30(4), 566-570. <https://doi.org/10.1016/j.jtv.2021.08.002>
10. Yoshinaga, N., Nakagami, G., Fukahori, H., Shimpuku, Y., Sanada, H., & Sugama, J. (2022). Initial impact of the COVID-19 pandemic on time Japanese nursing faculty devote to research: Cross-sectional survey. *Jpn J Nurs Sci*, 19(1), e12454. <https://doi.org/10.1111/jjns.12454>
11. 寺岡貴子., 深堀浩樹., 野末聖香., & 福田紀子. (2021). 日本の認知症高齢者を在宅介護する家族介護者の体験のメタ統合 [原著論文]. *日本精神保健看護学会誌*, 30(2), 39-49. <http://search.jamas.or.jp/link/ui/VC07360005>
12. 青山真帆, 中西三春., 深堀浩樹., 山川みやえ., & 宮下光令. (2021). 認知症患者の遺族の死別後のうつ・複雑性悲嘆と関連要因 [会議録]. *Palliative Care Research*, 16(Suppl.), S396. <http://search.jamas.or.jp/link/ui/2021263980>
13. 長尾祥子., & 深堀浩樹. (2021). 一施設における看護師の自己教育力と役割、院内研修受講の有無との関連 [会議録]. *共済医報*, 70(Suppl.), 59. <http://search.jamas.or.jp/link/ui/2022065488>
14. 白川翔., 菅野貴仁., 矢口秀穂., 塚田真由美., 長尾祥子., 廣山奈津子., & 深堀浩樹. (2021). 術前患者の不安軽減に関する質的研究を活用した教育的介入の影響 [原著論文]. *共済医報*, 70(4), 349-354. <http://search.jamas.or.jp/link/ui/W111500008>
15. 那須佳津美., 深堀浩樹., 廣岡佳代., 遠藤拓郎., & 宮下光令. (2021). 認知症の人の死亡前 1 か月の救急搬送と救急受診の要因:遺族への Web 調査の二次解析., [学会発表] 日本家族看護学会第 28 回学術集会.

# 1. がん患者向けのディシジョンエイド開発と活用のための医療者教育プログラム開発

## 2. 産科医療施設における共有意思決定教育に関する研究

大坂 和可子 慶應義塾大学看護医療学部 准教授

### A. 目標

医療に関連する意思決定支援の充実、標準化を目指し、患者、家族、医療者が共有できる意思決定支援ツールの開発方法と活用方法の普及、実装の促進につながる研究活動を行う。

### B. 計画および実施過程

1. がん患者向けのディシジョンエイド開発と活用のための医療者育成プログラム開発  
ディシジョンエイド開発と活用のための教育プログラムの作成
2. 産科医療施設における共有意思決定教育に関する研究  
多職種チーム向け共有意思決定支援教育プログラム Feasibility study 実施

### C. 目標達成状況

#### 1. 研究実践活動

##### 1) がん患者向けのディシジョンエイド開発と活用のための医療者教育プログラムの開発

2021年度は、2020年度に作成した講義資料を修正し、新たに、先行研究や海外のディシジョンエイドに関する情報を参考に、個人ワーク内容、ワークショップ内容について検討した。教育プログラムのプロトタイプを作成し、ワークショップを開催した。また、ディシジョンエイド開発支援を希望する医療者の支援を引き続き実施した。支援により、2件のディシジョンエイドが完成した。

##### 2) 産科医療施設における共有意思決定教育に関する研究

研究代表者のもと、メンバーとして産科医療に携わる多職種チームを対象とした共有意思決定教育プログラムの Feasibility study に参加した。おもに教育プログラムの作成や評価内容検討、研究計画検討に参加した。教育プログラムは、コロナ禍でも参加者が受講しやすくするため、全てオンラインで実施することとし、個人学習（オンラインオンデマンド型講義の受講など）、集合学習（事例に基づくロールプレイなど）で構成した。評価は、Feasibility study とし、特にプログラムに関する Acceptability（受容性）と、受講者の満足度を調査することとした。研究代表者所属施設の倫理審査委員会の了承を得た後、研究実施の了解を得た施設の産科医療に関わる医療者を対象に提供した。概ね受容性及び満足度は高かったが、所要時間等について課題が残った。

## 2. 今後の課題、展望

1の活動は、ディシジョンエイド開発と活用のための医療者育成プログラム提供、プロセス評価が課題として残っている。次年度は、研究期間を延長し、実施する予定である。

2の活動は、COVID-19の影響に伴い、対象施設の辞退があり、データ収集を終了した。次年度は、実施結果から評価を行い、成果報告予定である。

## 3. 2021年度の業績

1. 石川 ひろの, 武田 裕子, 大坂 和可子, 岡本 左和子, 藤崎 和彦. 多様性を理解し、支える医療コミュニケーション (解説). 日本ヘルスコミュニケーション学会雑誌. 2021;12(1):19-29.
2. 大坂 和可子. 患者中心の意思決定を支えるツール ディシジョンエイドの開発・活用・普及・教育 (解説). 聖路加看護学会誌. 2022; 25 (2) :42-45.
3. 素輪 善弘, 大坂 和可子. 個々の患者に最適な乳房再建を選択するための shared decision making (解説). ペパーズ (PEPARS; Perspective Essential Plastic Aesthetic reconstructive Surgery). 2022;183:47-55.

# 人びとの Well-being を目指す マインドフルネスとコンパッションによる プロジェクト

朴 順禮

慶應義塾大学看護医療学部

専任講師

## A. 目標

患者および家族、医療従事者への Well-being を目指す効果的な介入方法の研究・開発・実践・普及を推進するとともに、医療や社会へマインドフルネスとコンパッションによる心のケアの実践と普及を目指す。

## B. 計画および実施過程

- 1) 患者・家族および医療従事者へのマインドフルネスプログラムの研究開発
- 2) マインドフルネス・コンパッションに関する教育・普及活動

## C. 目標達成状況

### 1. 研究実践活動

マインドフルネスプログラムの実施は、Web を中心に展開した。特に医療従事者へのマインドフルネスプログラムでは、有効性が実証された MaHALO プログラムをオンラインで開催することにより、これまで参加できなかった地方からの医療従事者も増加し、プログラムへの満足度も高かった。医療従事者の well-being をサポートするプログラムは、日本ではほとんど実施されていないことを考えると、多忙な医療従事者には参加しやすいオンライン形式は有用である可能性が考えられる。

### 2. 今後の課題、展望

社会の急激な変化により効率的な医療が求められ、世界的な感染症の流行など絶えず変化する不確実な医療現場の中で、特に看護師がコンパッションを体現するには、道徳的苦悩など困難な課題も多い。けれども看護師のコンパッションが損なわれず、育む道筋は構築されていない。今後は看護師のセルフ・コンパッションを高め自分自身の看護のコアを大切にし、そのことが患者ケアへとつながるコンパッションプログラムを構築することが課題である。また引き続き、がん患者への WEB やハイブリットを活用したマインドフルネス介入の検証を行っていく。

### 3. 2021 年度の業績

#### 【論文・著書】

- Sado M, Kosugi T, Ninomiya A, Park S, Fujisawa D, Nagaoka M, Mimura M. A Long-Term Pilot Study of Mindfulness-Based Cognitive Therapy for Subjective Well-Being Among Healthy Individuals in Comparison with Clinical Samples. *Psychology Research and Behavior Management*. 021; 14: 1655?1664. doi:10.2147/PRBM.S318460

- Teppei Kosugi , Akira Ninomiya , Maki Nagaoka , Zenta Hashimoto , Kyosuke Sawada , Sunre Park , Daisuke Fujisawa , Masaru Mimura , Mitsuhiro Sado.  
Effectiveness of Mindfulness-Based Cognitive Therapy for Improving Subjective and Eudaimonic Well-Being in Healthy Individuals: A Randomized Controlled Trial. Front Psychol. 2021 Aug 27;12:700916. doi:10.3389/fpsyg.
- Mitsuhiro Sado, Akira Ninomiya , Maki Nagaoka, Akihiro Koreki, Naho Goto, Yohei Sasaki1 , Chie Takamori1 , Teppei Kosugi1 , Masashi Yamada, Sunre Park, Yasunori Sato, Daisuke Fujisawa , Atsuo Nakagawa , Masaru Mimura.  
Effectiveness of Mindfulness-Based Cognitive Therapy With Follow-up Sessions for Pharmacotherapy-Refractory Anxiety Disorders: Protocol for a Feasibility Randomized Controlled Trial. JMIR Res Protoc 2021;10(12):doi: 10.2196/33776
- 朴 順禮、藤澤大介. 患者の死と向き合う医療者への心のケア 保険の科学 第63巻 第3号 .p.179-183.2021.03
- 朴 順禮. ケアする人のケアを考える . 医療従事者のマインドフルネスとコンパッションを涵養する MaHALO プログラム . 認知療法研究 (1883-2296)14 巻 2 号 .p.137-138.2021.06
- 朴 順禮 セルフ・コンパッション 緩和ケア Vol.31 No.5 p.362-365.2021.09
- 藤澤 大介、朴 順禮 「各施設での組織的な取り組み」ーマインドフルネスとコンパッションによる燃え尽き低減プログラム：MaHALO プログラム . 緩和ケア .Vol.31 No.5 p.371-374.2021.09
- 朴 順禮 . がん患者への介入 . 佐渡 充洋他、精神科医療およびメンタルヘルスにおけるマインドフルネス療法の意義と未来 ー日本における現状と課題を中心にー. 心理学評論 .Vol. 64, No. 4.p.559-561.2021

#### 【学会発表】

- 瀧田結香、藤澤大介、朴 順禮、武田祐子 . PH 患者のための身体面・精神面を支えるプログラムの開発 . 第 6 回日本肺高血圧・肺循環学会学術集会 . 2021 年 5 月
- 山田 成志, 小杉 哲平, 二宮 朗, 是木 明宏, 橋本 善太, 長岡 麻貴, 朴 順禮, 藤澤 大介, 中川 敦夫, 三村 將, 佐渡 充洋 . 不安障害に対するマインドフルネス認知療法の follow-up program の feasibility study による効果および費用対効果の検証 . 第 8 回日本うつ病学会総会・第 21 回日本認知療法・認知行動療法学会 .2021 年 7 月
- 二宮 朗, 小杉 哲平, 是木 明宏, 橋本 善太, 永岡 麻貴, 山田 成志, 朴 順禮, 藤澤 大介, 中川 敦夫, 三村 將, 佐渡 充洋 . 健常成人に対するマインドフルネス介入の有効性を予測する要因の検証 . 第 8 回日本うつ病学会総会・第 21 回日本認知療法・認知行動療法学会 .2021 年 7 月
- 朴 順禮 教育講演：医療従事者の苦悩を癒すにはーマインドフルネスとコンパッションを中心にー 第 18 回日本うつ病学会総会・第 21 回日本認知療法・認知行動療法学会 WEB 2021 年 7 月

#### 【その他】

- 佐渡 充洋、二宮 朗、朴 順禮 . CT ワークショップ マインドフルネス認知療法基礎・体験編 . 第 18 回日本うつ病学会総会・第 21 回日本認知療法・認知行動療法学会 . 2021 年 7 月
- 藤澤大介・朴 順禮 . 体験を通して学ぶマインドフルネス～自殺リスクの軽減と支援者のセルフケア～ 愛媛県心とからだの健康センター研修会 2021 年 9 月
- 朴 順禮 「マインドフルネス実践ワーク」 ころのセルフケアマインドフルネスを体験してみよう . 東京家政大学看護学部シンポジウム .2021 年 10 月
- 朴 順禮、藤澤大介、佐藤寧子、瀧田結香、森下純子、田村法子、緑川綾 MaHALO プログラム WEB ワークショップ .2021 年 9 月から 10 月
- 朴 順禮、栗原幸江 「コンパッションを GRACE で取り戻す」 ワークショップ、第 4 回日本 GRACE 研究会年次大会 WEB 2021 年 12 月

# 「先導ナースの養成プログラム」の開発・検証

小池 智子 慶應義塾大学看護医療学部 准教授

## A. 目標

本部門は、看護サービスの開発・質改善を担う「ベストプラクティス先導ナース」に必要な力を高めるため「ベストプラクティス推進プログラム」、「ケース・メソッド教育を用いたマネジメント能力育成プログラム」、「勤務環境改善へナッジの活用」、を運営し、①プログラム改訂・教材の開発、②プログラムによる教育・提供を研修の提供、③効果の検証、④成果の発信を行う。

さらに、医療勤務環境の改善、ワクチン忌避の行動変更促進等の医療マネジメントに、行動経済学や行動科学等による知見（行動デザイン、ナッジ等）を活用した方策の開発、検証を行なう。

## B. 計画および実施過程

### 1. ベストプラクティス推進プログラム（ベストプラクティス研修）の運営・評価

ベストプラクティス研修として、①組織が置かれている外部環境および自組織の内部環境の分析を踏まえ、ビジョンと戦略を明らかにする。②課題の現状分析と要因分析を行い、施設内外の優れた実践例（ベストプラクティス）等も参考に複数の改善策を比較検討し、実施計画を立案し、③適切な目標・評価指標を設定し、プロセス評価・アウトカム評価を行う。医療機関の部署等において約1年をかけて①～③を実施し活動評価を行った。高い成果を達成した活動については、④標準化・定着を図り、期待した成果が得られなかった、あるいは不明な活動については、改善点を明らかにして、次年度の活動に継続し、改善が図られるようにした。

### 2. ケース・メソッド教育を用いたマネジメント能力育成プログラム

2021年度学事振興資金を得て「VUCA時代の看護職・看護管理者の構想力ならびに問題解決力を高めるケース・メソッド教育プログラムの開発」の研究を実施した。VUCA時代の看護職・看護管理者の能力を高める教育プログラムを開発するため、新たに新型コロナ感染時などの予測不能なケースに焦点をあてたケース教材を作成し、これらのケース教材を用い、看護管理者研修を開催しその効果を評価した。

### 3. 医療勤務環境改善に資する Nudge 開発・普及

行動経済学・行動科学等の行動インサイトの知見を活用し、医療機関・介護施設の職場をよりよくするための仕掛け・システムの開発・研究・教育を行なった。

### 4. 高齢者のワクチン忌避の行動変容を促進する新たなツール開発プロジェクト

2020年12月 Global Coalition on Aging and Pfizer Medical Grants の The Vaccines for All: Longevity Unleashed for Everyone (VALUE) に採択されたのを受け、自治体、医療関係者、研究者（看護学、医学、薬学、公衆衛生学、感染症学、行動経済学、デザインマネジメント等）、NPO/企業等のメンバーで構成される官民産学チームによる「高齢者のワクチン忌避の行動変容を促進する新たなツール開発プロジェクト

ト (Improving immunization coverage among 65 years and older population in Japan ?developing new tools for vaccine promotion and tracking of vaccine usage)」(2021年1月～2024年3月)を立ち上げた。なお、このプロジェクトは Johns Hopkins University, International Vaccine Access Center と連携して実施する。

2021年度は、デスクサーチと研究デザインの検討、研究フィールドとなる自治体への協力要請等を行なう。

## C. 目標達成状況

### 1. 研究実践活動

#### 1) 「ベストプラクティス推進プログラム」の実施と評価

2 医療機関で改定した研修プログラムを実施した。計 20 の職場 (病棟・外来・手術室) が約 8 ヶ月～1 年間にわたり、医療安全・感染管理・看護の質改善 (ケア提供システム改善・標準化等)・労働安全衛生・入退院支援等に関する質の改善活動に取り組んだ。各職場の活動評価 (中間・成果発表、成果資料) を看護部長・教育担当の看護管理者等と質的に分析し結果、①プロセス評価・アウトカム評価が適切に行なわれ、活動と成果の可視化が促進された、②看護単位内だけでなく、外来部門、多職種部門と連携をすることによって、より効果的に問題解決を図るケースが増加してきた、③各看護単位において質改善のモデル・手法が定着しており、質改善活動が継続的に実施され職場文化となってきた、④本プログラムの活動を通してリーダーシップ力が育成されている等の効果が確認された。

#### 2) 「ケース・メソッドによるマネジメント能力育成プログラム」の実施と評価

##### (1) 2021 年度に新たに開発したケース

慶應義塾大学病院看護部の協力を得て、コロナ禍や医師の働き方改革に伴い生じているマネジメント課題を取材し、内容を検討してケースと授業計画を作成した。全てのケースおよび授業計画について、裴英洙氏 (ハイズ株式会社 / 慶應義塾大学大学院健康マネジメント研究) のケースライティング・コンサルティングを受け、学習目的に叶った内容に精度を高めた。

- ・【Case1】「K 病院におけるコロナ禍での病床の効果的運用の再構築」(分析ケース)
- ・【Case2】「スタッフの経営目標達成への参画とやりがい感向上の両立を目指す！」(分析ケース)
- ・【Case3】「多職種連携による RRT 体制の院内への普及を図る」(分析ケース)
- ・【Case4】「ダイナミック造影 CT の造影業務のタスクシフト・タスクシェアの実現に向けて」  
(意思決定ケース)
- ・【Case5】「コロナ禍における入院患者の面会」(意思決定ケース)

##### (2) 慶應義塾大学病院看護部長研修 (自己研鑽) 「ケース・メソッドによる管理的思考の育成」

(2021 年 6 月～2022 年 3 月：全 5 回)

研修参加者は、看護師長 14 名、大学院生 (修士課程 2 名、博士課程 1 名)、教員 1 名。Case1～4 を用いて、ケースディスカッション (①事前学習、②グループディスカッション、③クラスディスカッション、④ラップアップ・補足講義) を行った。

##### (3) ケース・メソッド教育プログラムの実施

この他、以下の教育機関等で教育プログラムを実施した。

#### 【2021 年度ケース・メソッド教育実施大学・機関等】

- ・学部教育：慶應義塾大学看護医療学部「移行期看護」「ナースィングマネジメント実践実習」
- ・大学院教育：慶應義塾大学健康マネジメント研究科「看護管理論」「看護政策論」、神戸大学大学院保健学研究科 / 保健師コース「公衆衛生看護管理論」
- ・現任教育：認定看護管理者研修課程：東京都看護協会 (セカンド)、神奈川県看護協会 (セカンド)、



兵庫県看護協会（サード）、茨城県看護協会（サード）、岩手県看護協会（ファースト、サード）、授業・研修終了後、授業計画と授業評価（時間構成、発言数・時間）、受講者評価（内容方法、習得・達成内容等）を分析し、①問題の原因分析力、②解決策を比較検討する統合力、③説明力を総合的に評価した。

### 3) 医療勤務環境改善に資する Nudge の開発 研究・教育

医療安全分野のナッジ開発、新型コロナ感染対策におけるナッジ開発を行なった。

また、医療・介護従事者の現場でのナッジ設計を支援するため、OECD. Behavioral Insights Toolkit and Ethical Guidelines for Policy Makers (OECD; 2018) ならびに EAST Four simple ways to apply behavioral insights (The Behavioral Insights Team ; 2012) を参考に、ナッジ設計ツールを開発し、ナッジ設計ワークショップ開催した。

厚生労働省の委託を受け、「令和3年度 医療勤務環境改善マネジメントシステムの普及促進等事業 医療機関の働き方改革セミナー」において、「医療機関の職場をより良く働き方を変える仕掛け～ナッジ理論の活用」をテーマに5日間の職種別セミナー（医師・薬剤師・看護師・栄養士等・事務）および総括セミナー（1日：全職種）で基調講演を行い、それぞれの発表に対してコメントを行った。

### 4) ワクチン忌避行動変容プロジェクトの推進

2021年2月に VALUE (The Vaccines for All: Longevity Unleashed for Everyone) プロジェクトがスタートした。VALUE には、本プロジェクト（高齢者のワクチン忌避の行動変容を促進する新たなツール開発プロジェクト：VALUE Behavioral Insights Project）の他、日本医療政策機構、The International Longevity Centre-UK（国際長寿センター）の3つ研究プロジェクトが採択され、VALUE 本部である Global Coalition on Aging (GCOA) と連携し、3ヶ月毎の情報交換をしながら、社会に向けて広く成果を発信していく予定である。

第1回セミナー「市民との対話で市中感染を防ぐ：ワクチン・コミュニケーション」(2021.3.27 Online) を開催したほか、自治体向けの説明会を開催し、研究に参加する自治体の募集を行なっているところである。

## 2. 今後の課題、展望

「ベストプラクティス推進プログラム」と「ケース・メソッド教育を用いたマネジメント能力育成プログラム」は、新型コロナウイルス感染対策下における看護管理上の取り組みに焦点をあて継続して実施し、効果の検証と普及を行う。「医療勤務環境改善に資する Nudge 開発」においては、医療安全対策・感染対策も含めて行動インサイトやデザインを活用した問題解決の開発研究と普及をすすめていく予定である。

また、2021年2月より開始した、「高齢者のワクチン忌避の行動変容を促進する新たなツール開発プロジェクト」を推進し、研究サイクルのステップ2（デザイン思考によるワクチン忌避のボトルネック・アセスメント）を複数自治体で実施する予定である。

## 3. 2021年度の業績

### 【関連論文】

- 1)小池智子(2021): 医療勤務環境改善にナッジを活かそう！ 看護のチカラ 556：p6-11.
- 2)小池智子(2021)：ナッジで感染対策を設計しよう（特集「感染対策をナッジで後押し」），看護 73(7)：64-71.
- 3)Tomoyuki Takura, Tomoko Koike, Yoko Matsuo, Atsuko Sekimoto, Masami Muto (2022), Proxy

responses regarding quality of life of patients with terminal lung cancer: preliminary results from a prospective observational study, BMJ Open 2022;12:e048232. (doi:10.1136/bmjopen-2020-048232)

- 4) 小池智子 (2022) : 「ナッジ」でより良い業務改善や看護をそっと後押し : 「ナッジ」って何, 主任看護師 Style31(4):65-70.

#### 【学会発表 / 講演等】

- 1) 小池智子 : 医療安全におけるナッジの活用, 「シンポジウム : Unnoticed Factor (気づかれていない要因) に目を向けようー医療安全へのアナザーアプローチ」, 第7回日本医療安全学会学術総会 . (2021.5.29 ~ 6.7 WEB開催)
- 2) 橋谷典子, 小池智子 : わが国における孤立予防のための社会的処方 の現状, 日本老年社会科学学会第63回大会, (2021.6.12 ~ 6.27, online)
- 3) 佐藤陽子, 小池智子 : 特定機能病院の中堅看護師の職務継続意思に影響する要因, 第24回日本看護管理学会学術集会 (2022.8, online)
- 4) 小池智子 : 職場の問題解決にナッジを活用してみよう, JA 岐阜厚生連「看護管理看護管理者自主的研修会」. (2021.6.12, online)
- 5) 小池智子 : 職場をより良くする仕掛けーナッジのマネジメントへの応用, 公益社団法人全国自治体病院協議会「2021年第1回看護管理オンラインセミナー」(2021.7.1 ~ 9.30, online)
- 6) 小池智子 : よりよい意思決定に向けたナッジの活用 - 職場をより良くする仕掛け, 公益社団法人神奈川県看護協会看護師職能委員会 I 研修会 .(2021.10.22, online)
- 7) 小池智子 : よりよい意思決定に向けたナッジの活用 - 職場をより良くする仕掛け, 「公益社団法人大阪府看護協会 短期研修」.(2021年10月30日, 大坂)
- 8) 小池智子 : 健康をそっと後押し - 運動と行動経済学, 令和3年度地域産業デジタル化支援事業「運動器・フィットネス領域における新事業創出支援事業」ロコモ事業創出セミナー (第2回), (2021.12.10, online)
- 9) 小池智子 : よりよい意思決定に向けたナッジの活用ー職場をより良くする仕掛け, 日総研『主任看護師 Style』ナッジワークショップ, (2022.1.16日, 東京)
- 10) 小池智子 : 医療現場でのナッジ活用 - 職場をより良くする仕掛け, 東京都福祉保健局・病院経営本部管理者研修 病院幹部マネジメント研修「放射線技師」. (2022.1.25, online)
- 11) 小池智子 : エキスパートコース研修の学びを実践へー医療現場でのナッジ活用, 令和3年度 (令和2年度開講; 5期生)「東京都病院経営本部都立病院看護職員エキスパートコース講演」(2022.2.16, online)
- 12) 小池智子 : 基調講演「医療機関の職場をより良く働き方を変える仕掛けーナッジ理論の活用」~, 厚生労働省「令和3年度 医療勤務環境改善マネジメントシステムの普及促進等事業」医療機関の働き方改革セミナー【職種別】. (全5回 : 2022.2.12, 2.18, 2.21, 2.25, 2.28, online)  
[https://iryoku-kinmukankyou.mhlw.go.jp/information/seminar2021#section\\_01](https://iryoku-kinmukankyou.mhlw.go.jp/information/seminar2021#section_01)
- 13) 小池智子 : 基調講演「医療機関の働き方改革へのナッジの活用誰一人取り残さない改革の推進のために」, 厚生労働省「令和3年度 医療勤務環境改善マネジメントシステムの普及促進等事業」医療機関の働き方改革セミナー【総括セミナー】, (2022.3.4, online)

# 新型コロナウイルス感染拡大による地域住民の生活や地域活動の変化について

永田 智子 慶應義塾大学看護医療学部 教授  
山本 なつ紀 慶應義塾大学看護医療学部 助教

## A. 目標

COVID-19 の世界的な感染拡大を受け、本邦でも感染予防の一環として地域活動が中止／縮小され、地域住民の日常生活は大きく変容したと考えられる。そこで、COVID-19 感染拡大以降の、地域住民の地域での生活や活動の変化、その変化に伴う困りごとなどの実態把握を行うとともに、心理的ストレスとの関連を検討することを目的とした。

## B. 計画および実施過程

2021 年 3 月 10 日～3 月 31 日に神奈川県 A 市の 1 地区の自治会所属世帯（2,000 世帯）を対象に、世帯の中で「地域での活動・行事に参加している／関心がある者 1 名」に対し、無記名自記式質問紙の回答を依頼した。回答を得た 659 名（回答率 32.9%）のうち性別・年齢の記載のない者を除外し、647 名を分析対象とした（有効回答率：32.4%）。

なお、本プロジェクトは、地域看護領域の田口敦子先生・石川志麻先生、老年看護領域の深堀浩樹先生、政策・メディア研究科 内山映子先生、環境情報学部 秋山美紀先生、健康マネジメント研究科 小熊祐子先生らとの共同プロジェクトであり、SFC 研究所「未来フィールド開発ラボ」の研究助成を受けて実施した。研究実施に当たっては、慶應義塾大学 健康マネジメント研究科研究倫理審査委員会の承認を得た。

## C. 目標達成状況

### 1. 研究実践活動

回答を統計的に解析し、日常生活や地域活動の変化と困りごとの実態把握をおこなうとともに、心理的ストレス（K6）との関連を検討した。さらに、日常生活や地域活動の変化が年齢により異なっていたことから、これらの関連を年齢別に検討した。結果は学術集会および投稿論文により公表するとともに、調査対象地区の住民に配布する広報誌への掲載という形で住民への還元を行った。

### 2. 2021 年度の業績

内山映子、山本なつ紀、秋山美紀、石川志麻、小熊祐子、田口敦子、永田智子. COVID-19 感染拡大下の地域住民の生活調査（第一報）：変化・困り事の現状把握，第 80 回日本公衆衛生学会総会，2021 年 12 月 21～23 日（ハイブリッド開催）

山本なつ紀、内山映子、秋山美紀、石川志麻、小熊祐子、田口敦子、永田智子. COVID-19 感染拡大下の地域住民の生活調査（第二報）：変化・困り事とストレスの関連，第 80 回日本公衆衛生学会総会，2021 年 12 月 21～23 日（ハイブリッド開催）

Natsuki Yamamoto-Takiguchi, Eiko Uchiyama, Hiroki Fukahori, Atsuko Taguchi, Satoko Nagata. Age group differences in daily life changes among community residents during the COVID-19 pandemic: A pilot study on intergenerational comparison. Keio Journal of Medicine, in press.

# 看護ベストプラクティス研究開発・ラボ 2021年度 研究報告会

2021年度は、全2回の研究報告会を実施した。下記の通り報告する。

## 第1回研究報告会

日 時：2021年12月9日(木) 17時30分～19時00分

場 所：Zoomによるオンラインミーティング

参加者：28名

### 【講演】

#### 1. 石川 志麻（慶應義塾大学看護医療学部 専任講師）

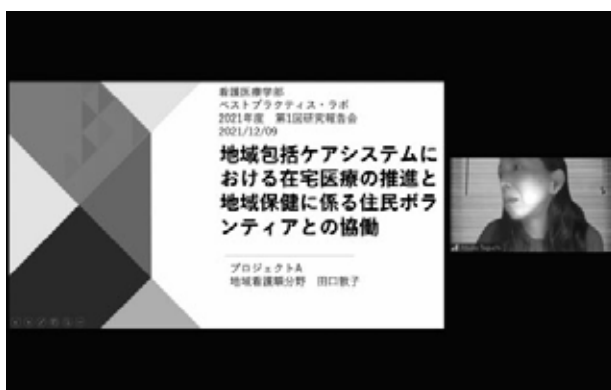
テーマ「医療的ケア児とその家族の生活拡大につながる多職種連携の促進・阻害要因」



講演後、インタビュー対象者のリクルート方法や分析方法についての質疑応答が行われ、家族や支援者に応じたサポートの必要性等について意見交換がなされた。

#### 2. 田口 敦子（慶應義塾大学看護医療学部 教授）

テーマ「地域包括ケアシステムにおける住民ボランティアの養成と協働」



講演後、調査結果の解釈等についての質疑応答が行われ、少子高齢化社会における「互助」の重要性について意見交換がなされた。

上記2名の教員による研究報告を通して、他分野の教員の研究内容を知り、それぞれが学びを深め、自身の研究課題について考えたり、モチベーションの向上につなげたりする貴重な機会となった。

## ■第1回研究報告会 アンケート結果（参加者 28 名、アンケート回答者 20 名）

### 1. 参加者の職業

教員	17 名
大学院生	3 名

### 2. 看護ベストプラクティス研究開発・ラボの研究報告会についてご存じでしたか。

よく知っていた	10 名
おおよそは知っていた	4 名
よくは知らなかった	5 名
全く知らなかった	1 名

### 3. 今回の報告会は、今後の参考になりましたか。

とても参考になる	4 名
少し参考になる	15 名
どちらとも言えない	1 名
参考にならない	0 名

### 4. 感想・意見（一部抜粋）

- ・素晴らしいご発表でした。研究の視点や方法など大変勉強になりました。ありがとうございました。
- ・普段、先生方の研究を知る機会がないのでとても貴重な機会になりました。素晴らしい研究のご報告と、その臨床活動を精力的に進めておられていて大変刺激になりました。
- ・先生方の研究報告を拝見できたことは、自身の研究課題、修士論文に向けて整理することに繋がること、またモチベーションにもなりました。
- ・相互研鑽しながら研究を発展させ、実践の質を高める活動を続けていくことはとても重要だと思います。
- ・このような報告会や研究、実践（臨床・教育等）に関する意見交換ができる場を大切にしてください。

## 第 2 回研究報告会

日 時：2022年1月25日(火) 17時30分～19時00分

場 所：Zoom によるオンラインミーティング

参加者：20名

### 【講演】

わかばの会メンバー

テーマ 「わかばの会」の活動を通して考える 一若手研究者の課題・ニーズ



講演後は、わかばの会のメンバーの活発な活動や、関係づくりの重要性を理解するとともに、研究と教育を両立していくための支援の必要性について意見交換がなされた。また、看護ベストプラクティス研究開発・ラボの今後について、教員間で研究を通じてつながることのできる体制づくりを検討することや、共通の目標を設定し取り組みを行っていくことの必要性が述べられ、今後の活動の在り方を検討する貴重な機会となった。

## ■第2回研究報告会 アンケート結果（参加者 20 名、アンケート回答者 16 名）

### 1. 参加者の職業

教員 16名

### 2. 看護ベストプラクティス研究開発・ラボの研究報告会についてご存じでしたか。

よく知っていた	9名
おおよそは知っていた	7名
よくは知らなかった	0名
全く知らなかった	0名

### 3. 今回の報告会は、今後の参考になりましたか。

とても参考になる	13名
少し参考になる	2名
どちらとも言えない	0名
参考にならない	1名

### 4. 感想・意見（一部抜粋）

- ・わかばの会のこれまでの活動の歴史や内容をお示しいただき、共有でき、改めて若手研究者の皆様のパワーと可能性を感じました。
- ・わかばの会やベスプラという場があることで、教育・研究に関する悩みや相談事を共有し、お互いを知るという交流の機会にもつながっていると感じました。同時に、参加メンバー個々に業務やプライベートがある中で、活動の負担感が大きいという意見も複数あるため、負担感の少ないかたちで存続できると良いのではないかと思います。
- ・ベスプラ、わかばの位置付けを再確認する機会となりました。業務内容やスケジュールの相違がある中で大変だとは思いますが、これまで創り上げてきたものを継続することに価値があるのではないかと思います。何らかの形で継続できたらと思います。
- ・教員の研究推進に向けた体制の再検討に、学部全体で取り組む必要性を強く感じた。
- ・臨床に直結する教育や研究、社会貢献につながる研究を行っているという実感を持てる場であることを期待したい。



若手研究者の会

# わかばの会

慶應義塾大学看護医療学部 専任講師  
新幡 智子, 田村 紀子

慶應義塾大学看護医療学部 助教 (有期)  
秋元直子, 浅川翔子, 杉本美希, 高橋知彦, 田久保美千代, 平岩千明, 本田晶子, 松崎愛,  
真志田祐理子, 山本香織, 山本なつ紀

## A. 目標

様々な専門分野の若手研究者が協働し、柔軟な発想や活気あふれる行動力を基に、創造的に研究・教育に取り組み、これからの看護学の発展や大学教育の充実への貢献を目指す。

## B. 計画および実施過程

- |             |                                                                  |
|-------------|------------------------------------------------------------------|
| ・2021年6・7月  | 今年度の活動方針・計画の検討                                                   |
| ・2021年9・11月 | わかばカフェ                                                           |
| ・2021年12月   | ベストプラクティ斯拉ボ・報告会 準備                                               |
| ・2022年1月    | ベストプラクティ斯拉ボ・報告会 発表                                               |
| ・2022年2月    | 第1回勉強会「デジタルファブリケーションが拓くケイパビリティ」<br>第2回勉強会「新たな教育方法の効果的な活用について考える」 |

## C. 目標達成状況

### 1. 研究実践活動

今年度は、メンバー間の交流を図るとともに、若手研究者および若手教育者として関心のあるテーマを検討し、テーマに沿ってオンライン勉強会を企画・運営した。さらに、これまでのわかばの会の活動内容を振り返り、現在の課題と今後の展望をまとめベストプラクティ斯拉ボ内の報告会で発表した。

#### 1) わかばカフェ

教育や研究について気軽に情報交換や悩みを相談できる場を目指して、2016年度よりわかばカフェを開催している。2021年度は9月、11月の2回企画し、昼食時に、Zoomによるオンライン下で開催した。1回目は、自己紹介に加え、他の教員に聞いてみたいことを話し合っで交流した。コロナ禍でキャンパスを超えた交流が乏しい中、それぞれの臨床経験や研究活動などを共有でき、刺激を受けたとの感想があった。また、ワークライフバランスを図る難しさが多く語られ、研究活動と他の活動との両立の





仕方や、博士課程進学に向けた動機付けなどについて共有された。2回目は、コロナ禍で実習を進める上での、学生への対応や指導体制、実習指導者の継続的な確保の困難さなどを共有した。領域を超えて若手教員同士で励まし合い、相談できる場となった。普段の教育の様子や人柄を知り、業務上の相談や調整など日常における連携に向けても、心理的ハードルが軽減される機会となった。

## 2) 第1回勉強会：「デジタルファブリケーションが拓くケイパビリティ」

若手教員としての研究能力・研究活動の向上を目的に勉強会を開催した。今年度は、ITとヘルスケアを融合し新たな看護分野を切り拓く活動をされてきた宮川祥子准教授よりご講義いただいた。講義ではケイパビリティを主軸に、災害現場におけるヘルスケアにITを導入する取り組み、Fab Nurseプロジェクトの活動、ワークライフバランスに関する経験談等をお話いただいた。参加者からは、社会的な問題や日常場面で生じる課題をどのように活動・研究に繋げるのか等質問が挙げられ、意見交換を実施した。「ヘルスケア」や「意思決定支援」、「パートナーシップ」など、看護学領域で重要となるキーワードを用いながら、メンバーが各自の専門分野について多角的な視点で考え、研究や実践、教育の視野を広げる機会となった。

## 3) 第2回勉強会：「新たな教育方法の効果的な活用について考える」

COVID-19感染拡大の影響で2年間にわたり試行錯誤しながらオンライン教育に取り組んできた。そこで今年度は、これまでの経験をふまえ、オンライン教育と対面教育を組み合わせたより効果的な教育方法の活用について考えることを目的に勉強会を実施した。当日は、11名が参加し、他大学における教育の実践例として、オンライン教育による看護過程の演習や在宅学習としての技術演習、ハイブリッド教育による周手術期実習の取り組みやSAMRモデルについて、文献や体験をもとに担当者が講義を行い、情報を共有した。その後、グループに分かれて、新たな教育方法のメリット・デメリット、今後に向けた工夫や課題について話し合い、全体で共有した。終了後のアンケート結果から、「他領域と情報交換できる機会」となり、「学生の学習意欲を促進する問いの重要性」や「臨床実習でなければならない教育内容の明確化」等を再認識したとの回答が得られ、各自が効果的な教育方法の活用を具体的に考える機会となっていた。

## 4) ベストプラクティスラボ報告会

2022年1月にオンラインで開催されたベストプラクティスラボ報告会において、わかばの会でのこれまでの活動を振り返り、現在の若手研究者としての課題と展望をKPT法を用いてまとめ、発表した。

## 2. 今後の課題、展望

毎年度新規メンバーの参画があり普段は異なる分野で教育・研究活動を行うメンバー同士が、わかばの会を通して交流の機会をもつことで教育方法や研究活動に関する情報共有を行うことができた。また、勉強会では教育観の醸成や研究活動に対する意欲の向上を得る機会となり、ワークライフバランスを整えながら活動を行う上での励みとなった。

今後も個々の能力向上を図れるよう、若手教員同士が定期的に交流できる機会を設けるとともに、人的資源を活用しながら教育・研究活動の推進に努める。

